

令和元年6月18日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11593

研究課題名(和文) 関節リウマチ患者の関節負荷防止のためのセルフケア技術獲得を促進する看護モデル開発

研究課題名(英文) Development of Self-care Support for Patients with Rheumatoid Arthritis

研究代表者

浅井 美千代 (Asai, Michiyo)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授

研究者番号：20212467

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：関節リウマチ患者の関節負荷防止に向けたセルフケア技術獲得支援は、関節リウマチ患者のセルフマネジメント状況を明らかにすることが、個別的支援のいとぐちになるとの見解に至った。まず、概念分析により「慢性疾患患者のセルフマネジメント」の構成概念を明らかにし、その結果を基に関節リウマチ患者のセルフマネジメント状況を測定する尺度を開発し、その活用可能性を検討した。その結果、尺度は、23項目5因子構造となり、尺度の妥当性と信頼性は概ね確保された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により開発した尺度を、患者はセルフマネジメントの自己評価として、看護師は患者のセルフマネジメント状況を知るツールとして用いることで両者間の協働が促進されることを期待できると考える。また、本尺度と慢性疾患患者のセルフケア尺度(SCAQ)との相関が弱かった2因子は関節リウマチ患者特有の療養法や観察項目であり、これらの項目をその疾患や特定の治療に特有の療養法や観察項目に置き換えることで、他疾患や特定の状況でのセルフマネジメント尺度として活用可能であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Objective:1) To clarify the characteristics of self-management in patients with chronic diseases through concept analysis, 2) to develop a scale in order to evaluate such management performed by patients with rheumatoid arthritis (RA), and 3) to verify its usability. Methods: 1) Concept analysis was performed, adopting the method of Walker and Avant. 2) Based on the characteristics of self-management in patients with chronic diseases clarified through 1), questions to evaluate such management performed by RA patients were created, and their reliability and validity were examined. 3) Scores from the developed scale were compared to verify its usability. Conclusion: The validity and reliability of the developed 23-item, 5-factor self-management scale for RA patients were generally sufficient. The usability of the scale was also supported by the 5 factors, accurately reflecting the contents of self-management that should be performed by patients.

研究分野：臨床看護

キーワード：関節リウマチ セルフケア セルフマネジメント 関節保護

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

関節リウマチ (以下、RA) は、長期にわたって進行し、関節の痛みや変形により QOL を低下させるため、患者によるセルフマネジメントが重要になる。近年、RA はメトトレキセートや生物学的製剤により寛解状態に導くことが期待できるようになり、痛みというサインがない状態で関節を保護した生活を求められるなど、セルフマネジメントはさらに重要になり複雑化している。しかし、我が国における RA 患者のセルフマネジメントに関する先行研究は少ない。また、自己管理状況を測定する尺度には、本庄が開発した慢性疾患患者のセルフケア尺度 (以下、SCAQ) があり、高血圧、糖尿病などは疾患特異的な自己管理測定尺度の開発が試みられているが、RA は自己効力感の測定にとどまっている。さらに、我が国においてセルフマネジメントの概念は、セルフケア、自己管理と交錯して用いられている現状がある。

2. 研究の目的

概念分析により「慢性疾患患者のセルフマネジメント」の構成概念を明らかにし、その結果を基に RA 患者のセルフマネジメント尺度を開発し、その活用可能性を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) Walker and Avant の方法を参考に、慢性疾患看護の国内文献を対象として、我が国における「慢性疾患患者のセルフマネジメント」の概念分析を行った。分析対象文献は、医中誌 Web 版を用いて、我が国の看護分野でセルフマネジメントが用いられ始めた 2001 年以降の過去 15 年間 (2001 年 ~ 2015 年) の和文献で検索し、論文タイトルに「セルフマネジメント」の用語を含み、慢性疾患患者のセルフマネジメントについての記述のみられた 26 論文とした。論文ごとにセルフマネジメントの属性、先行要件、帰結についての記述を抽出し、コード化した。抽出されたコードを、「属性」「先行要件」「帰結」ごとに類似性と相違性を識別しながらカテゴリー化した。

(2) (1) で明らかにした慢性疾患患者のセルフマネジメントの構成概念に基づき、RA 患者のセルフマネジメント実践状況を測定する尺度原案を作成した。尺度原案の表面的・内容的妥当性を検討した後に、RA 患者への質問紙調査を実施し、尺度の信頼性と妥当性を検討した。質問項目の構成概念妥当性は、探索的因子分析により因子負荷量の低い項目等を削除した後、確認的因子分析により検討した。併存妥当性は、試作尺度と SCAQ との相関関係から分析した。信頼性は、質問項目全体及び下位尺度の対応質問項目に対する Cronbach's α 係数を算出し、内的整合性を検討した。

(3) 開発した RA 患者のセルフマネジメント尺度の活用可能性について、(2) の対象者から尺度得点により、高得点群 (+1SD 以上) と低得点群 (-1SD 以下) を抽出し、「慢性疾患患者のセルフマネジメント」の先行要件・帰結及び患者の基本的属性、医学的情報との相違から検討した。2 群間の差の検討は、調査内容の回答が数量化できる項目は t 検定、順序尺度は χ^2 検定により行った。

4. 研究成果

(1) 我が国における「慢性疾患患者のセルフマネジメント」の概念分析

慢性疾患患者のセルフマネジメントの属性として、【慢性疾患と共に生きるために生じた課題に対処する活動】【課題への対処法を洗練するプロセス】【医療者とのパートナーシップに基づく協働】の 3 つが抽出された。先行要件としては、【疾患・症状管理の必要性の自覚】【苦痛の体験】【情報により得られたセルフマネジメントへの肯定的認識】【自己効力感】【支援者の存在】

の5つ、帰結として【慢性疾患と共に生きる生活方略の獲得】【慢性疾患の悪化移行の予防】【身体活動の維持・改善】【症状緩和】の4つが導き出された。

以上より、我が国における慢性疾患患者のセルフマネジメントを、「慢性疾患と共に生きる人が医療者とのパートナーシップに基づく協働により、疾患特有の管理とその影響の管理という課題に対処する活動であり、その人が問題とすることに主体的に取り組み、対処法が洗練されていくプロセスである。」と定義づけた。

(2) 尺度原案の信頼性・妥当性

「慢性疾患患者のセルフマネジメント」の属性として導き出された【慢性疾患と共に生きるために生じた課題に対処する活動】【課題への対処法を洗練するプロセス】【医療者とのパートナーシップに基づく協働】の3つの属性に即して、RA患者のセルフマネジメント内容30項目を作成した。30項目について、リウマチ専門医5名とRA看護実践5年以上の看護師3名による妥当性の検討及びRA患者4名による表面的妥当性の検討を行い、リウマチに特有の療養法やリウマチの病状進行を予防するための具体的な観察項目を18項目追加し、尺度原案は最終的に48項目となった。

質問紙調査は、東京近郊の医療施設に外来通院中のRA患者を対象に実施し、149名の回答を分析対象とした。

探索的因子分析では、最終的に23項目となり、＜関節リウマチと共に生きる方法を洗練する＞8項目、＜生活の充実に向け工夫する＞5項目、＜関節リウマチの養生法を実践する＞4項目、＜身近な支援を活用する＞3項目、＜身体状態をモニタリングする＞3項目の5因子構造となった。概念分析結果から導き出された属性の【医療者とのパートナーシップに基づく協働】に関する質問項目は、探索的因子分析の過程で、複数の因子にまたがっていたため、除外項目となったが、属性の【慢性疾患をもつことにより生じた課題に対処する活動】に相当する因子が＜RAの療養法を実践する＞＜身体状態をモニタリングする＞＜生活の充実に向け工夫する＞＜身近な支援を活用する＞、属性の【課題への対処法を洗練するプロセス】に相当する因子が＜RAと共に生きる方法を洗練する＞ととらえられる。

探索的因子分析により、因子負荷量の低い項目を削除した5因子23項目に対し、5因子を一次因子、「セルフマネジメント実践力」を二次因子とする5因子23項目の二次因子モデルを仮説として構築し、確証的因子分析を行った。その結果、確証的因子分析におけるモデル適合度指標はGFI=0.804、AGFI=0.759、CFI=0.861、RMSEA=0.078であった。この結果は、一般的なモデル受容の目安とされている値には達していなかったが、パス係数の推定値は有意であったことから、サンプル数の少なさが影響したと考えられ、以上より、構成概念の妥当性は概ね確保されたと考える。

RA患者のセルフマネジメント尺度23項目の合計得点と、SCAQ合計得点とのピアソンの相関係数は $r=0.733$ ($p<0.01$)であり、両者の間に相関がみられた。

また、各因子(下位尺度)とSCAQ合計得点との相関係数は、＜RAと共に生きる方法を洗練する＞ $r=0.627$ ($p<0.01$)、＜生活の充実に向け工夫する＞ $r=0.598$ ($p<0.01$)、＜RAの療養法を実践する＞ $r=0.398$ ($p<0.01$)、＜身近な支援を活用する＞ $r=0.550$ ($p<0.01$)、＜身体状態をモニタリングする＞ $r=0.326$ ($p<0.01$)であった。以上より、RAセルフマネジメント尺度とSCAQとの併存妥当性を確認できた。

質問項目全体のCronbach's α 係数は0.887、各因子では、＜RAと共に生きる方法を洗練する＞は0.884、＜生活の充実に向け工夫する＞は0.782、＜RAの療養法を実践する＞は0.719

<身近な支援を活用する>は0.742、<身体状態をモニタリングする>は0.714であった。信頼性の基準となる0.7以上であり、質問項目の信頼性を確保できたと考える。

(3)開発した尺度の活用可能性

尺度得点の高得点群と低得点群との2群間において比較検討した結果、医学的情報については、生物学的製剤の使用経験にのみ有意差がみられ、高得点群に生物学的製剤の使用経験のある者が有意に多かった($p=0.025$ $p<0.05$)。

先行要件では、低得点群において、【疾患・症状管理の必要性の自覚】($p=0.007$ $p<0.01$)、【情報により得られたセルフマネジメントへの肯定的認識】($p=0.017$ $p<0.05$)が低く、自己効力感尺度得点も低かった($p=0.03$ $p<0.05$)。【支援者の存在】についても、身近な人の心理的支援($p=0.009$ $p<0.01$)、医療者の活用度($p=0.000$ $p<0.001$)が有意に低かった。

帰結では、QOL尺度得点にのみ有意差がみられ、低得点群においてQOL尺度得点が有意に低かった($p=0.009$ $p<0.01$)。

以上より、高得点群にQOL得点が有意に高かったことから、本尺度はRA患者がQOLを維持しつつ、病気の悪化を予防するための活動内容を示すと考えられる。RAは病状や症状の個別性が高く、患者は自分の状態を他者に説明することが難しく、看護師は患者の状況を捉えることが難しいため、本尺度を患者はセルフマネジメントの自己評価として、看護師は患者のセルフマネジメント状況を知るツールとして用いることで両者間の協働の促進が期待できると考える。また、SCAQとの相関が弱かった2因子はRA患者特有の療養法や観察項目であり、これらの項目をその疾患や特定の治療に特有の療養法や観察項目に置き換えることで、他疾患や特定状況でのセルフマネジメント尺度として活用可能と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

浅井美千代、青木きよ子、高谷真由美、長瀬雅子：我が国における「慢性疾患のセルフマネジメント」の概念分析，医療看護研究，13(2)，10-21，2017.

〔学会発表〕(計2件)

浅井美千代、青木きよ子、高谷真由美、長瀬雅子：我が国の慢性疾患におけるセルフマネジメントとその類似概念についての文献検討，第36回日本看護科学学会学術集会(東京)，2016年12月.

浅井美千代、青木きよ子、高谷真由美、長瀬雅子：関節リウマチ患者のセルフマネジメント尺度の信頼性・妥当性の検討，第38回日本看護科学学会学術集会(愛媛)，2018年12月.

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：青木きよ子

ローマ字氏名：Aoki Kiyoko

所属研究機関名：順天堂大学

部局名：医療看護学部

職名：特任教授

研究者番号(8桁)：50212361

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。